リリカルなのは～落ちこぼれと言われた英雄～

笑い顔の猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルなのは～落ちこぼれと言われた英雄～

【Ｎコード】
Ｎ５２１４Ｖ

【作者名】
笑い顔の猫

【あらすじ】
初級魔法しか使えないがために、『落ちこぼれ』と言われた主人公「ジオニス・ウォルエール」であったが、
多くの困難に立ち向かい、多くの人を救ってきた彼は『英雄』と呼ばれるほどの功績を残した彼であったが、
とある破壊された残骸の処分を行おうといた時、
原因不明のエネルギー上昇が・・・
急ぎ転移を行おうといたが失敗してしまい、
ついた先が何とリリカルなのはの世界だった！？

この先主人公ジオニスに何が待ち受けているのか！？

笑い猫「なんかやってしまった感がありますが後悔はしていない！！」

キリッ！

注：作者は素人ですので平にご容赦を・・・ｍ（。＿。；））ｍペコペコ…

注：書いていると無理っぽいので無印からでなくＳｔｒｉｋｅｒＳからに変更します・・・

第一話　始まりは突然訪れる（前書き）

笑い猫「いきなりの変更、すんまっせーん」m（。＿。；））m
ペコペコ…

刹那「無理なようならするなよ」

笑い猫「だが後悔はしていない！！」（キリッ

刹那「いばるな！！」

第一話　始まりは突然訪れる

そこはただ広い森の中・・・

ズドオォォォォォン！！！！

そこには、顔は中性的で、白く長い髪を縛り、瞳は青色、
腰に二丁の銃を備え、接近戦用と思わせる黒い服装を着こなした男が一人、
その男の名前は「ジオニス・ウォルエール」・・・

男とはまったく逆で、茶色で長い髪を靡かせ、瞳は赤、
ドレスのような赤い服を着こなしていて、
両腕には鳥のようなタトゥーを入れた、
『アドモス』と呼ばれる契約精霊の女の子一人、
その女の子の名前は「レイン」・・・

そして、全身を硬い緑の鱗を纏い、危険ランク度Ａに認定されている、
『トライラントドラゴン』と呼ばれる全長３０ｍはあろうか、
巨大なドラゴンがその場に存在していた・・・

現在の状況を一言で表そうとするのなら・・・そう・・・

「いやぁあああぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁあぁあぁぁぁぁぁ！！！！！」

「ギャオオオォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

ズドオオオォォォォォォォォォォン！！！！

逃走中である。

「なにっ！？今日は疫日なの！？
なんでこんなの所にトライラントドラゴンがおるんじゃぁあぁぁぁぁ！！！！」

「何をいまさら・・・いつものことじゃないですか。」

「否定できない事実がとてつもなく悲しいぞおい！！」

ああ認めてやるさっ！初級魔法しか使えなかったり、誘拐されたり、落とし穴やトラップで死にかけたり、魔力暴走したり、果てには魔王？を倒しに行ったり・・・

「運が悪いのなんて昔っからじゃあぁぁぁぁ！！（泣」

「サラッ、と言いましたが運がただ悪いのじゃなく、壊滅的に運が悪いだけじゃないですか。」

「あれぇ！？声に出てたのか！？てか壊滅的に、って・・・俺に救いは！？」

「そんなもの・・・あれの中にあるんじゃないですか？」

指の指したものそれは・・・

「ん？トライラントドラゴンを指して、って俺にあれに食われろと！？」

「らくになんなよ、旦那♪」

「ぶちのめそうかコラァ！？！？ってかお前ほんとに俺のアドモスかよ！？

一応曲がりなりにも主は俺だよ！？」

「主？なにそれ？おいしいの？」

ガシッ←つかむ音

ポイッ←投げる音

「投げないでよおぉぉぉぉぉぉ！！！」

「なんだ？食われてなかったのか、ッチ！」

「あからさまな舌打ちされた！？」

「まぁ、気にしないでもう一度いってk「ごめんなさい、もう言いません、
ご主人様バンザーーイ！！」ったく！！」

追われている最中だというのに何とも気の抜けた会話が成り立っているのだが、

「フゥー・・・マスター、そろそろ森を抜けますよ・・・準備をどうぞ」

急に声のトーンが下がった・・・まるで誰かと人格が変わるように、
一瞬で目つきが変化すると同時に男は腰にある銃で森の抜けた先に引き金を引く！

ドガガガガガガガガッッッ！！！

撃ちだされた銃弾により、

森を出た先は砂煙で視界がゼロの状態になってしまう・・・

「ギャオオォォォォォォォォォォォォッッッ！？！？」

いきなり前が見えなくなったことでトライラントドラゴンは驚きのあまり、
砂煙の中動きを止めてしまう・・・
だがその行動は間違いであった・・・

「・・・戦場や戦いの場で足を止めるということはどういうことを招くかわかるか？」

声が響くと同時に突風が吹く・・・そのおかげで砂煙がはれるとそこには、

「そんなの決まっていますよ・・・

答えは『次の日の朝日が拝めなくなる』

・・・ただそれだけです」

大きな円を描くように、クルクル回りつつ、
トライラントドラゴンの首に巻きつくように、
空中に５０を超える炎と氷でできた魔力弾が向かっていき・・・

「撃ち貫き落とせ、『氷と炎の終焉(アイスフレイムレジェンド)・天使の輪形態(エンジェルリングバージョン)』」

ズドドドドドドドドドドドドドドッッッッ！！！！！！！！！

「ギャオオオオオオオオオオオオオオッッッッ！？！？！？！？！？」

トライラントドラゴンの周りに纏わりつくように魔力弾は一斉に放たれ、
首のまわりをぐるっと円を描くように撃たれたのだが、

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオッッッッ！！！！！！」

それだけでは倒すことなどできず、更に怒りを買うのだが・・・

「さすがだな、だがこれならどうだ？
『アドモス、契約執行、弾丸を形成、属性雷、準備(ロード)』」

「『契約を受諾、雷を形成、コード『その一撃は天をも貫く』、確定(セット)』」

ジオニスとレインは契約を執行・・・

レインに淡い光が灯し、ジオニスの体には稲光が走り、
ゆっくりと二丁の銃を構えた・・・

「『確認終了』これで終いだ・・・
『双角(ツインホーンライトニング)なる雷』」カチッ

スウゥゥンッッッ・・・ッカ！！！！

ズガアアァァァァァァァァァァァァンッッッッ！！！！！

引き金は引かれ、その一撃は轟音とともに放たれた。
二丁の銃より放たれた攻撃は視界を覆うほどの攻撃であり、
それを食らったトライラントドラゴンは首から上がなくなり、
体は音を立てて崩れた・・・

「ジ・エンド・・・ってか？」

「お見事、さすがだね・・・これだけのことができてなんで二つ名が
『落ちこぼれた英雄』なんだろねぇ・・・」

「ん～？仕方ないんじゃねぇ？初級魔法しか使えないのは本当だし？
てかお前だって『欠陥精霊』って呼ばれてんじゃねぇか」

「それはほかの奴らじゃ魔力がへなちょこすぎるのが原因だ、

私にゃ落ち度はないね」

「はぁ～・・・とりあえず調査を続けるぞ・・・」

「がんば♪」

「てめぇも手伝えよ！？」

こんな森に調査をしに来ているのは、1年前に俺が破壊した『ヴァルサス』
と呼ばれていたものの残骸があると噂があり、
それの処分に来ていた。

なぜ残骸を処分しているかと言うと、ヴァルサスの残骸はいわばエネルギーの塊、
だが、同時に悪質な物質も混ざっているため、爆発する恐れもあり、
さらにそれを使って悪質な物を新たに生み出そうとする組織もいたためである。

爆発や悪用を防ぐため、多くの残骸が国の手によって処分されてきたが、
森の奥や山の奥まで飛ばされてきたものは国からの手が届かず、放置されてきた。
その放置されてきたものはこの1年をかけて発見、処分を行ってきたためやっと、
残骸があると噂されているのはこの森だけとなっていた。

「う～んやっぱりこの近くに「それにしてもジオ～」っとなんだ？」

「最後の残骸、破壊した後どうすんの？またギルドで名を馳せる？
それともどっかのも国でも仕えてみるの？」

「あ～・・・1年間も残骸の処分を続けてきたからそればっかりだったもんな～・・・
はっきり何も思い浮かばねぇや」

「確かにね～・・・やることが急になくなっちゃうとな～・・・
旅って言うならほとんどの大陸わたっちゃたし～」

事実、2人が旅に出たのは四年前のジオニスが15歳頃、
なし崩し的にヴァルサスを破壊することになったり、
誘拐から人助け、はたまた国の反乱まであったほどだ。

それだけの経験を体験するのに伴い、
さまざまな国に回り、自分たちが知りうる大陸を制覇してしまっていた・・・

「まぁ何をしようか考えるのも後だ後、俺らにはまだまだ時間があることだし、
ゆっくり考えていったらいいだろ？」

「まぁ俺もそうだね～、って・・・ジオッ！あれっ！！」

「ん？おお、あったな・・・ってでかっ！？」

見つかった残骸は身の丈の6～7倍あるかと言うほどの大きさであり、
黒くてまるで刃でも思わせるような残骸であった。

「はぁ～・・・よくこんな大きなものが残ってたね」

「・・・」

「ん？どうしたの？」

「マクマーレ王国の連中、絶対調査の手抜きしてやがったな・・・
今だけの質量がもし爆発するようなことがあったら森が消えてなくなるぞ」

「ん～仕方ないんじゃない？それはジオにだってわかってるはずじゃない？」

「しっかし、いくら独裁国家を転覆させたからってなぁ～」

「でも元に戻す方法なんて時間もかかるわお金もかかるわのオンパレードでしょ？
昔っから変わらないじゃない、『壊すのは簡単、でも直すのは難しい』ってね」

「はぁ～・・・しゃーねーか、とりあえず処分するぞ」

そう言ってレインとともにジオニスはエネルギーの割合を調べるため残骸に触れたその時、

スウゥゥゥゥゥゥンッッッ！！！！！

「「！？」」

いきなりヴァルサスの残骸は震え始めた

「な、エネルギー率が上昇してる！？ジオッ！！」

「何が起こってんだ！？いったいどうしてっ！？っく！！
『アドモス、契約執行、転送、繋がれ（リンク）』」

ジオニスは焦りながらも来た道の３０ｋｍ離れた森の入り口へ転移しようとするが、
どんどん残骸の震えは大きくなっていく・・・

「『契約受諾、転送先、確認、道筋（ロード）、不安定（イレギュラー）、強制、確定（セット）』

そのおかげで転移に影響が出てしまい、空間をつなぐ道筋が歪んでしまい、
不安定になったが、いつ爆発するかも分からない残骸の近くにいるとさらに危険なため、
強制的につなぐ・・・

「（間に合うかどうかは五分五分（フィフティーフィフティー）・・・間に合ってくれ！！）

『確認完了、転移（ジャンプ）・・・開始（スタート）』

フォブオォォォンッ！！

その時大きな光がほとばしり、空を高く高く、天を裂くほどの光が昇っておった・・・

その光は徐々に収まると、二人と残骸があった場所には何も残ってはいなかった・・・

第一話　始まりは突然訪れる（後書き）

刹那「あれ？どこも変わってない？」

笑い猫「いや変わってるぞ？名前が」

刹那「微妙だな・・・」

キャラ紹介

『落ちこぼれた英雄』

ジオニス・ウォルエール

性別　男　年齢　１９歳

身長１７５ｃｍ

魔力量　計測不能

戦闘スタイル『詠唱呪文』『ガンスタイル』『ブレイドディフェンド・トリックスタイル』

３つのスタイルを使い分けるオールラウンダー

魔法を使った詠唱呪文が使用できるが、

体質上の関係で初級魔法しか使用することができない。

所持している二丁の銃は特別製であり、剣としても使え、名前は『ＢＢ（ブレイドスター）』

性格は物事を深くは考えない大雑把性格だが、先のことはちゃんと考えることができ、

嘘や隠し事を見抜くことができる

良くも悪くも自分の想いにまっすぐであり、かなりのお人よし

瞳の色は青く、髪の色は白、顔立ちは中世的で、化粧の仕様によってはかなりの美人に？

誰にでもまっすぐに向きあう温かな心の持ち主
かなりモテるほうだが本人は鈍感である・・・
ちなみに彼に惚れている理由のほとんどが・・・
曰く、『いつもは飄々としていてただ気安くかかわれる存在だが、
いざ困った時に必ず助けてくれるから』らしい・・・
昔敵だった者でも救うと決めたら即行動に移すためさらに性質の悪
いことに・・・
レインからのコメントとして一言「こいつはいなくなった方が世の
女性のためだね・・・」
と言うほどである

『詠唱呪文』・・・ジオニスはだれでも手軽に使えるような簡易的
な魔法しか扱えないが、
『古代魔法式（ハイエンシェント）』を習得しているため無詠唱で、
その上複数同時に魔法の発現が可能である・・・

『ガンスタイル』・・・ジオニス本人がオリジナルで考え出された、
銃を扱った特殊な戦闘スタイル『古代魔法式（ハイエンシェント）』
が編みこまれており予測不能な攻撃方法が・・・？

『ブレイドディフェンド・トリックスタイル』・・・ジオニスには
剣の才能はなかったが、
相手の攻撃を防ぐこと、受け流すこと、避けることに関しては一流、
一部からは絶対防御陣と呼ばれるほど堅牢な守りであり、

このことからよく攻撃魔法の練習に的されている・・・
（どうせなら攻める才能のほうが欲しかったと涙ぐんでいる）
だからと言って反撃ができないわけではなく、『古代魔法式（ハイエンシェント）』
が編みこまれており、不可思議な現象が・・・？

契約精霊『アドモス』　『欠陥精霊』

名前『レイン』

性別　女　年齢　不明

身長１７～１８ｃｍ

性格はいつも天真爛漫、からかうことが大好きで調子に乗りすぎる
ことがしばしば・・・
だが決め手となる所は恐いくらい冷静になる

『アドモス』・・・主人公の世界である契約精霊の別名
契約者の覚悟を受け入れ、思いをに答えることで契約精霊はそれを
糧に生きることができる

『欠陥精霊』・・・レインの場合特殊であり、
契約者の莫大な量の魔力をともに必要とするため
並の魔法使いではすぐに魔力はなくなってしまい
契約者から欠陥精霊扱いをされてしまう・・・

『契約魔法』・・・契約とは、
『魔を扱いし者(マギ)』と『精霊』との間に結ばれた約束のようなもの
精霊がつかさどる森羅万象、『火』、『水』、『風』、『雷』、『土』
など『始まりの魔法』・・・最強と称される力が可能になる
普通の契約魔法は1組に付き1つの属性しか使うことができないが
レインの場合莫大な魔力を必要とする代わりに全属性の契約魔法が
使用可能になっている
さらにこれに『古代魔法式(ハイエンシェント)』を加えると・・・？

『古代魔法式(ハイエンシェント)』・・・過去に忘れられた魔法とされている
この世のありとあらゆる秘宝されていたものもあったが術式の解明
が難しく、
年を追うごとに継承し、継ぐ者がいなくなっていったとされている
魔法
現在ではその多くが各国の城の書庫に置かれている・・・

『威力魔法式(バーストエンシェント)』・・・初級魔法より強力な魔法とされている
『古代魔法式(ハイエンシェント)』の代わりに編み出された魔法で複雑な術式を編み出
すことなく、
強力な威力の魔法を放つことを可能にした物
だがジオニスはこれを扱うことができなかった・・・

『自分だけの能力(パーソナルアビリティ)』・・・？？？

第二話　異世界での戦闘とファーストコンタクト（前書き）

笑い猫「ど～も！！！お久しぶりっす！！」

刹那「すでに忘れられてるんじゃねぇか？」

笑い猫「・・・忘れられてないといいな・・・

とりあえずどうぞ！！」

第二話　異世界での戦闘とファーストコンタクト

転移の後・・・

「…いつつぅ…ここは…？」

目を開けると森の中だった…どうやら爆発から逃れられたようだ…
とりあえず転移自体は成功したみたいだな…
でも…

「…ここどこだ？（ムクリ）森は森でも違う森っぽいし…？それにあれは…
ん？あれ、レイン？レイーン？どこ行った？」

体を起こし、見回すとレインの姿が見えなかった、まさかあいつだけ失敗いたとか？
そんなことを思っていると、

「ぷぎゅ～～～～～～～～～～～～…」

「？なんだ、今の変な声？どこから聞こえて来んだ？」

「ぷぎゅ～～～～～～～～～～～～…」

「…？尻の下？」

恐る恐る尻の下を見てみると…

「ぷぎゅ～～～～～～～～～…」←お尻で乗られているレイン

「…」←お尻で乗ってる俺

結論…！！

「見なかったことにしよう…」

「サッサと退けやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッッ！！！！！！！！！！」

…ちょっと待ってね♪

「おごおぉぉぉぉぉぉ…」ぷしゅうううぅぅぅぅ…

「たくっ！」

いてぇ…魔力を込めた拳で何発も殴りやがって…

「サッサと退かないあんたが悪い、それで？ここどこなの？」

「さぁな、目的地と違う場所っぽいな・・・俺にもここがどこだかさっぱりだ
だがここは俺たちが来たことのあるような所じゃないのは確かだ」

「…？どういうこと？
仮にも私たちは世界のありとあらゆる場所は制覇したはずでしょ？
なのに来たことがないって…」

「簡単だ、回りをよく観察すればわかるこった、それにあれも見れみな…」

回りを見渡してみるとただの森、
だがよくよく観察してみると見たことのない植物があったり、
さらにゼオニスが指した先には崩れた遺跡があった
だが作りや俺たちが知っている文字が若干違っていたりしていた…

「…これ、似てるけど私たちとは違う言語？一応読めるけど…
ゼオ、これって一体…」

「…考えられるとすれば、俺たちが来たことのない大陸、

もしくはっ！？」

続けて言いかけたその時だった、
後ろに何かを感じた俺はその場から横に一歩体をずらすと何かが横を通り過ぎ、
すぐそこの岩場が崩れた

背後に目をやると、見たことのない、
縦に長い長方形のような金属のような物がフヨフヨと浮いていた…

それを見て確信した…

「…もしくは、異世界に来ちまったか…だな…」

その言葉をつぶやくと同時に、
周囲から同じようなものが一、二、四、八、十六、三十二、七十四
――――――――――――――っ！！
数えるのがばからしくなり、あっという間に囲まれてしまった…

「…すごい歓迎の仕方みたいだね、この世界は」

「ハァ…来て早々にドンパチやらかさなきゃならんとはな…」

そう呟きながらゆっくりと銃を構え…

「ま、精々楽しませてもらいますか…」

そう呟くと同時に、回りの機械との戦闘が始まった…

ｓｉｅｄ　　とある魔王さん

「何か聞き捨てならないことを聞いた気がするなの…」

失敬、では管理局の白い悪ｍ「あまりしつこいとお話を」すませんでしたあああぁぁぁぁ！！

ｓｉｅｄ　　なのは

「郊外で中規模の次元震を観測！第六課局員は直ちに現場へと向かってください！！」

シャーリーの緊急連絡を告げる声を聞きながら、
私達はヘリの中で休憩時間の撤回に嘆くスバル、
それを叱りつけるティアナを見て笑みを零していた、

次元震が起こったのは機動六課本局の北東、市街から十キロの位置にある森、
かつて遺跡があったといわれているが今は瓦礫となっているような場所だった…

「でも、次元震なんて珍しいですよね、
見る限りでは何もないところだと思うんですけど…」

赤髪の少年、エリオがデバイスを握りながら呟いた
その視線は送られてきた地形図に注がれている
そこには山々が延々と連なるばかりで、瓦礫となった遺跡があるくらいであった位・・・
研究所や建物といったものは見受けられなかったからだ

「そうだね、何があったんだろう…？」

彼の隣に座る十歳の少女、キャロが少し不安そうに呟いた
次元震といえばかなりの大事なので、そのことが気にかかっているのだろう

「安心して、今捜査官を先行させてるし、
もし戦闘になっても今回は私と現場に向かってるフェイト隊長が出るから
みんなはヘリの中で待機だよ」

そう言うと、キャロはほっと安堵の息を吐いた
それに私は苦笑を零す、
ずっとそれじゃ困るけど、心構えの時間くらい欲しいのは事実だからね

と、そこにフェイトちゃんから通信が入った

『なのは、こっちも現場に向かってる…
あと十分くらいで着けそうだけど、状況はどう？』

その問いに私は今ある情報を告げた
私の言葉にそう、と短く返し、
必要な情報のやり取りをする
だが、分かっていることはほどんど同じような有様であった
原因は分からないが、何かが起こっていることは間違いない・・・

「なのはさん！先行してたヤツから今通信が入ったんですが、
ちょいとヤバイことになってるようですぜ、
結構な数のガジェットが集まってるらしいって話だ」

その言葉にフォワード陣の顔が一斉に強張った
気持ちを切り替えてモニターを見やると、
フェイトちゃんにも通信が入ったのか顔つきが仕事というか戦闘モードに切り替わっている
と、そこでまたしてもヴァイスくんが、今度は先ほどより声を大き

く荒げた、
マイクに向かって、確かなのかと何度も確認している

「どうしたの？」

「あ、えっと、先行してた局員の到着報告と現場情報の追加でさ
拙いことに、民間人がガジェットと交戦中だそうですぜ、
それも百を超える数に対してたった一人ってことらしい…」

「「「「！？」」」」

ティアナたちの顔がさらに強張り、エリオとキャロの顔が目に見
えて青くなった
その反応も当然だといえる…
ガジェットはまだ駆け出しとはいえ魔導師である自分達四人がかり、
それも訓練で手こずった相手だ、
それを百という大群相手にたった一人など、生身の人間がどうこう
以前の問題である…

この報告に私は少し焦りを抱いたが、
それを表情には出さず努めて冷静を装いながら問いかけた

「それでその人は？無事なの？」

「いや、それなんですが…なんと言いましょうか…」

いつもざっくばらんな彼が珍しく言いよどんだ
最悪の事態が一瞬頭をよぎったが、彼の反応はそれを否定している
なんだか現実を認めたくない子供のようだ

『ヴァイス？』

いつもと違う彼の様子に通信を繋げてきたフェイトも首を傾げているが、観念したように息を吐くと、車をはじめて見た御者のような顔をして口を開き、

「それが…その民間人、ガジェットを次々に落としてるって報告が来てるんでさ…
もう残りが半分にまで減ってるって…」

「「「「「ええええええええっ！？」」」」」

今度こそフォワード陣が驚愕の叫びを上げた
私も一瞬その報告に危うくフリーズしかけ、
フェイトちゃんも同じく画面の向こうで固まっていた・・・
というか、さっきの報告からまだ三分も経ってないのに半分って・・・
・

軽く副隊長クラスだ

「す、すごい人がいるんですね…」

「規格外ってこと考慮すりゃ同意見だなぁ、しかし…
その民間人はミッドやベルカとも取れない、
見たことのない魔法と銃を使ってを戦ってるみたいなんだが…」

「見たことのない魔法？」

「えぇ、なんでも、火や水、雷と言った様々な魔力弾を同時に飛ばしたり、
撃った銃の弾を兆弾させながら戦っているみたいなんです…」

その答えに再びその場の全員は固まってしまった、

「すごい…複数の魔力変換資質でも持っているのでしょうか？」

エリオがつぶやくが誰かが答えることはなかった…
当然だ、普通、魔力変換資質があるといっても精々は一つか二つ、
なのに戦っているされている人は幾つも変化させつつ、
その上同時に魔力弾を出して戦っていること本来あり得ないことだ、
驚きすぎて声も出ない状況になっていたのだった…

呆然となったような空気の中、私たちは現場に向かう…

ｓｉｅｄ　　ジオニス

「そぉ…らっ！！！」

「…フッ！！」

高速で動きつつ、俺は手に持った銃で、
レインは独自に魔力弾を放ち機械を落としている、
周りを囲まれた状況だが、それは決して不利な状況ではない、
なぜなら…

「ピュン！ピュン！」

囲んでいる機械からビームのようなものが打ち出されるが、

「無駄だ、『干渉』」

打ち出された攻撃を銃でそわせるように構え、
当たると同時に打ち返しそのままビームは巻き戻るように帰っていき、

ズドォォン！！

破壊する

同じような攻撃を繰り返してくるが、
攻撃を避け、逸らし、跳ね返し、さらに、
跳ね返すと同時に振り回された銃からも撃ち出され、
レインも複数の魔力弾を同時に放ち、
二人は踊りでも踊るように、その動きに合わせ機械は次々落としていく…

『リフレクトロールショット』…通称反射回し撃ち

俺は『干渉』と呼ばれる技能を持っている、
本来魔法弾に当たると属性に応じ、
『氷』なら凍ってしまい、『火』なら燃え、『風』なら切り裂かれてしまうが、
『干渉』は、それを魔力で繋げ、
攻撃方向を変えたり跳ね返したりできるようになることである

そのため、二丁の銃を振り回し弾き返し、
さらに振り回しながら他の敵を撃つスタイルである

『干渉』の弱点はタイミングを間違うと普通より大きなダメージを負ってしまうため、
かなりの危険を伴い、その上中級魔法以上の攻撃にはまったく意味を持たない…

「だけ、っど！　あんま好きじゃないんだよ、　っな！　これっ！」
「え？　いいじゃん、かなり使えるじゃん、　よっ！」
避け、弾き、弾き返し、撃ちながら話を繋げる彼らには余裕すら感じられる…
「だってこいつは、　よっ！タイミング、　がっ！めんどいじゃねぇ、　か！」
「たしか、　に！だけどそれ以上、　に！」
動きを合わせ、俺たちは同時に高く空に駆け上がり、空中で止まりゆっくり狙い定め、
「「うざったらしすぎる（んだよっ）！！」」
自分たちが先ほどまでいた場所にとある『雷』の属性の魔力弾を撃ち込む、すると、
同時に、青い線と線が繋がって行き、地面に強大な魔法陣浮かび上がり、そして、
「こいつで仕舞いだ『青き終焉なる雷（ブルージャッジメント）』」

ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアンッッッ！！！！

青い雷が回りを喰らうように湧き出て、その場に囲んでいた機械を貫く、
すると動かなくなり、次々と墜落して行った…
戦闘中、俺は特殊な銃弾を撃ち込んでいた

『魔法陣（スクエアマジック）』…魔力弾による塊を繋げた魔法陣

戦闘中にあっちこっちに魔力弾による楔を打ち込むことで流れを作り、
さらにそれを繋げることで複雑な魔法陣を形成、
キーとなる属性の魔力弾を撃ち込むことで完成する

今回作り上げた魔法陣『マインディングサンダー』の属性のこもったものであり、
エネルギーを吸い取ることができる物であった

そのおかげで機械は魔力エネルギーだけでなく、エネルギーを吸い取る力が強すぎたため、
機械が正常に動くために必要な回線などが切れてしまい、
動けなくなってしまったという訳である

一体も残らず動けなくしたことを確認すると、ゆっくりと地上に降り立った

「ふぅー・・・結構な数がいたなぁ」

「だね、でも小手調べみたいに感じたんだけど・・・」

「ああ、どうやら俺達はこの世界じゃ異物扱いなのかもしれんな、
なんかさっきの自動ゴーレムと言うより人為的な感覚があったような…」

「もともとが人為的なんじゃない？
私たちの世界みたいに作る作っておいてそのまま放っておいて後は暴走した～、
って感じじゃなさそうだし…作りを見るに回収とかを目的にした感じだね」

「う～ん…ここなりのルールか、もしくは国と国とのいざこざか…」

ルールだった場合めんどくさいことになるが、
国とのいざこざならまだましなんだがなぁ～と、
思いつつ機械がどんなものか調べるようとした所…

「とまりなさい！」

「ん？」

声掛けられた方向へ向いてみると…

向かって左側の女性は腰までである金色の髪をツインテールに纏めている、
容姿は整いなぜか警戒をしているが、普段は優しいのだろう、
非情に徹しきれていないような印象が見られる…

紅い瞳を持ち、服装は白のマントに黒を基調とし、
手には何やら物騒な長い斧のような武器を持っていた…

対する向かって右側、
こちらも容姿は左よりもよりクールなピンク色のポニーテールを風に靡かせる美人さん、
と言ったところか…

こちらは切れ長の目付きに戦闘には非情になりきれそうな、
服装はといえば白とピンクを基調としたイメージとしては騎士がシックリくるそんな感じだ

左の腰にチラリと見えるのは間違いなく剣だろう、
抜剣はしていないが、
こちらもなぜかかなりの警戒をしており彼女の威圧感を倍増させている…

――――――この出会いが、

――――――どうなっていくか…

――――――この時の俺には、

――――――全く分かっていなかった…

第三話　グダグダの口論、空気の美人さん達？（前書き）

笑い猫「やっはーっ！！久々の投稿で忘れられているかもしれないが笑い猫だにゃっ！！」

刹那「…誰だお前？」

笑い猫「お前の作者だよ！？そこは覚えていようよ！！」

刹那「投稿させんのが遅いせいだろうが…自業自得だ」

笑い猫「（グザリ）グッハァ！？っく…痛いとこ付きやがって…なかなかネタが思いつかないし、時間ないから仕方ないでしょ！？まぁ今回は３話分一遍に出します！遅れてさ～せん！！

第三話　グダグダの口論、空気の美人さん達？

「（武器を捨てろ、ねぇ…）」

現在状況！
草むらから美人さんAとBが現れた！！

『なんか変なのが聞こえたような？』

『作者（バカ）の戯れだ、気にするな』

そんなっ！！ひどいっす！！

「管理局です、いますぐその手に持っているものを地面に捨ててください」

管理局？やはり聞き覚えがねぇな…完璧に異世界か…

『どうする？』

『ふむ…』

軽く現状確認をしてみよう…

1、俺は異世界から来たよそ者でここのルールなど全く知らない

2、目の前の二人はさっきのロボットを操っていた親玉ではないことはわかる…
警告なしに撃ってきた奴らと、武器を捨てろ、と言って来ている人とは違いがあるからな

3、警告してくることから何か俺はこっちの世界のルールに違反していること可能性が高い

って言ったところか、ならば選ぶ選択は…っと、考えが浮かばせようとした時、

「1、逃げる　2、戦う　3、ナンパする↑（笑）

どれを選ぶ！？」

素晴らしいと言っていいほどの笑顔で、
レインがバットをフルスイングするかの如く、場違いな爆弾を投下した…

その爆弾のせいで目の前の二人は「へっ？」っと、
鳩が豆鉄砲を喰らったような表情をしている…

おい…

「こらちょっと待てレイン…」

「さぁどうする！逃げるか、戦うか、それともナンパして口説くか！？」

「なんでこんな所でナンパしなくちゃなんねぇんだよ！？明らかにおかしいだろうがっ！！」

「えぇー、だって、『美人さんを見つけたならばナンパしなきゃ失礼に値する、よってジオはその行動に出るのが大義である！！』ってアスベルが言ってたよ？」

「またなのかっ！？またなのかよコンチクショウッ！！んな大義なんかあるかボケェェェ！！！あの野郎余計なことしか言えねぇのかあのあほぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

そのおかげでレインはいらねぇことを覚えちまってんじゃねぇかクソがあぁぁぁぁっ！！

「『まぁ何もしなくてもゼオは無自覚で女を口説きまくるから大丈夫だろうがな（笑）』とも言ってたよ？そこには激しく同意するけど」

「なにそれっ！？」

「え？だって…ねぇ…？」

「異議あり！！断固異議を申し立てるぞこの野郎！！
いつ俺が女を口説いたよ！？」

「異議を却下します（哀）」

「却下した上に（哀）って何！？俺を哀れんでやがんのかよコラァッ！！」

この野郎…ここはきっちりと誤解といておかなきゃいけねぇなぁ！！

こうして横合いでどう納めればよいのか分からずオロオロしている
金髪の女性と、
警戒心を解いたが茫然としているピンク色のポニーテールの女性を
そっちのけにして、
口論という名の語らいを開始した…

ｓｉｅｄ　　フェイト

次元震が起きた現場にやってきて、
先ほどまでガシェットと戦闘していた人を発見した…
その人は白く長い髪を縛り、瞳は茶色、手に二丁の銃を持ち、

動きやすそうな黒い服装を着こなしていて、
どこか飄々としたような雰囲気を持つ男の人とリイン位の大きさの女の子がいました…
私はその人に所持していた銃を捨てるように警告を出した所、
私とシグナムを見比べた後、リインと同じぐらいの大きさの子と急に…

「いろんな面で哀れと言われても仕方ないでしょ？今までが今までだけにさぁ～」

「やっかましいわ！！そのドヤ顔やめやがれ、いい加減腹が立つわ！！」

よくわからないけど口論を始めました…

「あ、あの～…」

「あ？あぁ、悪いが少し待ってくれ、
このバカを修正しなくちゃならなくなったからな！！」（クワッ！）

「ひゃ、ひゃい！」（ビックゥッ！！）

「そんな興奮したような目つきで女の子を見るなんて…やっぱりケダモノね～」

「誰がケダモノだ、このボケナス！お前が違う意味での興奮させてんだろうが！！」

「興奮？いくら美人さんだからって…」

「何そのうわぁ、って顔！？
美人さんなのは同意するがテメェの思ってる興奮の意味違うからなっ！？」

声を掛けたが、なおも口論を続ける二人…そろそろ話を聞いてほしい…（泣）

『え～っと…シグナム？どうしたらいいと思う？』

『ここで私に振られても困るのだが…、
なのは達が来るまで放っておいても大丈夫だろう思うぞ？』

私もその点においては大丈夫だと思う…
目の前の二人はどう見ても悪い人に見えないし、
バルディッシュを向けたにもかかわらず、
手に持った銃も構えず、敵意すら向けてこなかった

それに私たちが知らない魔法を使っていた点から次元漂流者なんだろうと思う…
でも、

「だああぁぁぁぁっっっ！！！なんでそんな根も葉もないことがあんだよっっっ！！」

「おやおやぁぁぁ～♪
確か前どこぞのお姫様を連れ出してナイトハイ楽しんだ上に朝帰りだったじゃん♪
どうせベットの上で『ピーーーー』して『ピーーーー』した上に『パッパラパッパッパー』してたのでしょうに？そしてそれを異世界で返り咲き…」

「やってねぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！
それって国の謀反があった時のこと言ってんじゃねぇだろうな！！
あれのどこが楽しめんだよっ！？ただ逃げ回ってたんじゃねぇか！！！
っつか『パッパラパッパッパー』ってなんだよっ！？
異世界でそんなんしてたらドン引きじゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

テレビで言う放送禁止されそうな単語が飛び交わすのはやめてほしい…／／／

「はわわわわっ／／／『シ、シグナム～…』」

「…／／／『私は知らん！！聞こえないふりをしろ！！』」

はぅぅ～、どうすればいいの～？

目の前の二人を止めることもできず、顔を赤く染め、
片方はアワアワ、もう片方はあさっての方向を向いて聞こえにフリをしていて、

それの元凶となる二人まだ言い争っているという何ともおかしな光景は、
後続としてやってくるなのは達が来る時まで言い争っていた…

それよりさっき異世界に来たって言ってたけど…
その原因知ってるの？

第四話　自己紹介と過去の説明、そして勧誘？

「…で？なんでボロ雑巾のようになっとん？」

機動六課の部隊長室にジオニスは来ていたのだが黒焦げのカッコになっていた…

なぜなら…

「…それはあんたの所の魔王にやられたからだよ」

「っはぅ！って私魔王じゃないよっ！？」

「じゃあ悪魔だろ、いきなり砲撃魔法なんて打ち込んできやがって…話を聞いてほしいからって撃ちこんでくるような奴は悪魔か魔王で十分じゃっ！！」

～回想～

俺は森の中、レインと口論と言う名の語らいをしていた時だった…

「そしてフラグばかり建てて最終的には落とすんでしょ？」
「フラグってなんだっ！？落としてねぇよっ！
危険ばっかりしかないのに首突っ込み拓ねぇよっ！？」
「死亡フラグ乙ｗｗ」
「そっちのかいっ！？」
「…あの～」
横から声をかけて来る人がいるが、俺たちはそれに気づかずなおも
話し続ける…
「しかもそれはフラグ立てまくりすぎた上で
「あなたが私のものにならないのならいっそ私の手でっ！！」
と後ろから刺されて…」
「ヤンデレかよっ！？」
「なりかけの子がいたよ…」
「あの！！すいません！！」

横からおおきな声で話しかけてくる栗色の髪をした女性が居るがそれに気がつかず、
やれやれと顔を横に振りつつ話しているレインに怒鳴りながら話していると

ブチィッ…

「いい加減に話を…」

「〜〜だからなぁ、って　ん？」

ようやく話しかけてくる女性に気が付いた…

だが気づくべきであった…

すぐ横から感じる強大な魔力に…

「聞いてよっっ！！」

横を見た光景、それはピンク色の魔力が吹き出ている、
白い服を着た女性が何やら凶悪な杖を構えている姿だった…

「ディバイィィィン…」

「へ？　いや、　ちょっと待ｔｔ「バスタアァァァッッッ！！！！」
ウギャアァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッ――――――」

～回想終了～

「あ、あれはそもそもあなた達が話を聞いてくれなかったのが悪いの！！」

「それを差っ引いたとしてもいきなりぶっ放す奴があるか！！」

「な、なのは落ち着いて…」

「あ…ははは、不運やったなぁ…」

「はぁ～…不幸だ…」

とっさに緊急障壁を張ってなかったらどうなっていたことやら…っと、
微妙な空気の中重たい息を吐く

「ハァ～…もういいや…とりあえず自己紹介しようか、
俺はジオニス・ウォルエール　こっちは俺の契約精霊の…」

「レインって言うわ、よろ～」

すると、目の前にいる関西弁の女性は顔を引き締めた

「ウォルエール君にレインさんって言うんやな、うちは八神はやてって言うんや」

「私は高町なのはって言います」

「私はフェイト・テスタロッサです」

「呼び方はジオでいいぞ、そっちの呼び方だと呼びにくいだろ、八神お嬢さん、高町お嬢さん、テスタロッサお嬢さん？」

「へ？お、お嬢さん／／／」

「あぅ／／／」

「お嬢さんって／／／…ならジオ君って呼ばせてもらうわ、それと私もはやてでええよ…

初めにやけどなんでこっちの世界に来たん？

フェイトちゃんの話だと、

口論しとった時、異世界に来た原因がわかってそうなこと言っとった、って聞いたけど…」

「（あぁ、あんときかって、何顔を赤くしてんだ？）」

「（…鈍感）」

何故っ！？

――――――――

口論の時にフェイトは異世界から来たという単語を聞いていたいため、
次元漂流者になってしまった原因を話した…

「…へ～　そうやったんや」

「あぁ、破壊作業に移ろうとしたら急に暴走を始めたから驚いたぜ」

「ねぇ、その『ヴァルサス』って元々は一体なんだったの何なの？」

「あ～…実際には何だったのか、詳しくはわかってねぇ…　分かっていることは１つ、
あれは…
災厄の塊　それしか言えねぇ…」

「災厄の塊？」

「ふぅ～…」

俺は大きな溜息を1つ吐き、　昔起きたことを説明し始めた…

―――あれが来たのはほんの数年前のこと、俺たちが住んでいる星に隕石が降って来た…
初めはただの隕石と注目はあまりされてはいなかったが、
世界各地で異常現象が見られるようになった

原因不明の魔物の大量発生や狂暴化、
とある国ではやさしかった王様が急に悪政を敷くようになった、
またあるところでは大規模魔術展開に失敗し、
滅びてしまった国もあるなど、
今までにそんなことは起こっていなかったのに隕石が降ってきてから建て続けて、だ…

さすがにおかしいと思った各国は隕石を調べることになった

その隕石のことを『ヴァルサス』と口承…

隕石、『ヴァルサス』が降ってきて様々な問題が多く起こり、
調査隊を派遣するが、1人も帰ってくることはなかった…

これに対し、俺の住んでいた国はギルドの冒険者たちにクエストを依頼した

ギルド…俺が簡単に訳せば『なんでも屋の仲介場』…かな？

様々なところで起こる問題、たとえば魔獣や盗賊の討伐、遺跡の調査、
荷物の護衛、戦いの助っ人など、
依頼をギルドに登録している冒険者に紹介している組織である

報酬は参加者に金貨三十枚の前金、
さらに原因を突き止め最悪の根源を突き止め、
その根源の破壊に成功した者にには金貨三百枚、
ランクはBクラス以上、期間は約3カ月、
行き先は隕石落下付近、強力な魔物が潜伏しているところである

これを見た冒険者たちはこぞって参加したがそれがいけなかった…

多くの者冒険者が調査のため向かった頃、
それを見計らったかの様に国に魔物が大量に攻め込んできた

強力な冒険者たちは調査に出払っており、国が滅びてしまうかに思われた…

――――――

「…でその後はどうなったんや？」

「あ、　いやー…その…の、残ったみんなで頑張って追っ払った、ぜ？」

「「「？」」」

今まで普通に話していたのに急にとぎれとぎれになり始めたゼオに
首を傾げる三人

「どなんしたんや急に？」

「そ、それはｎ「はっきり言っちゃえば？自分が救ったってさぁ」
ってレイン！！」

「「「え？」」」

「あんたもいい加減認めちまいなって、あんたのおかげだーってみ
んな言ってんだし」

「だけどよ…」

「だけどもかしこもないよ！
あの場にあんたがいなきゃ国は確実に滅んでいたのは確かなんだ、
みんなも認めてんだし、胸を張りな」

「ぐっ…」

俺は苦い表情を浮かべ、レインは面倒臭そうな表情、
そして目の前の三人はポカーンっとした顔を浮かべている

「く、国を救ったって、　ホンマなん？」

「……あぁ、本当だ、　俺は国を救ったよ…」

「まぁかなりぎりぎりだったねぇ、あれは…」

そう呟くと、レインは語り始めた

――――――その頃のジオはぎりぎりの時まで『古代魔法式（ハイエンシェント）』を習得できておらず、
私とも契約魔法の魔法陣も完成させていなかった…
それどころかジオのギルドランクはＥランク、
戦闘面で役立たず（そう思われていた）であったため、
魔物との城の防衛戦にも参加していなかった
城の決戦の時、　魔物の軍勢は６０００、　対する俺たちは１０００…
圧倒的に不利な状況の中で俺の『古代魔法式（ハイエンシェント）』ついに完成した…

できあがった『古代魔法式（ハイエンシェント）』の１つ、
『無限なる雨（インフィニット・レイン）』って言う広範囲殲滅魔法を使用、
敵上空に巨大な魔法陣が展開され、ありとあらゆる初級魔法が降り注いだ…

初級魔法の１発１発は確かに弱いだろう…

だがそれが１０発なら？

１００発なら？

１０００発ならどうだろう？
それほどの数の魔法を撃ち込まれては耐えらる者はまずいないだろう…
一億を超えている魔法弾の雨…
敵も耐えられることもできず、全滅することとなった…

―――――――――――――――――――――――――――――

「その後、国は再編して新たにゼオを『ヴァルサス』の元の送り込み破壊に成功、
その功績によりジオは英雄扱いされるようになった、って訳さ」

「そうやったんか…」

「…ハァ～」

「えっと、どうしたの？」

レインが一通り語り終えると、英雄と呼ばれている当の本人はなぜかため息を吐き、
その上なぜか不満そうな表情を浮かべている

「…いや、なんでもないさ
まぁこれで俺は一通り話したわけだが…」

苦笑しつつ強引に話を切り替え、
三人に、管理局員としての三人に問いかける

「俺は一体これからどうなるんだ？」

はっきり言えば俺の力は異常だ

この力は俺に莫大と言えるほどの魔力があるからこそ『古代魔法式（ハイエンシェント）』を使えている
さらに俺はこの『古代魔法式（ハイエンシェント）』に俺のオリジナルの術式を編みこんでいるため、
通常の魔力量しか有して人が使えば、速攻で干からびて死んでしまうだろう

だが、こちらの世界でも科学が発達している
想像だが、科学力を交えて『古代魔法式（ハイエンシェント）』が使えるようになり、
私利私欲のためだけに使うような輩の手に渡れば何が起きるかわからない

こちらの過去の歴史でも、世界の破滅を目論んだ輩もいるくらいだ

だからこの『古代魔法式(ハイエンシェント)』技術の漏えいは絶対にできない

たとえ相手がどんないいやつでも、正義の味方でも、だ…

さらに悪いことに俺の世界はたぶんこっちでは発見できないだろう…

管理局って言うのは、迷い込んだものをもといた場所に帰してやる、
って言うのが仕事みたいだが…
何せ俺の世界はある意味『特殊な世界』だしな〜

ともあれ帰れないとなると考えうる状況は

1、俺は大量の魔力と凶悪な魔法を有している

2、もといた場所に帰れないとなると、
それだけの力を有した者を組織としてただ見逃してくれるとは思えない

3、となるとどっかで隔離される可能性、
もっと悪くなると実験動物(モルモット)にされる恐れもある…

３に関しては話がうますぎることから考えた訳だ…
所詮組織なんて力が大きければ大きいほど影は大きくなる物、
昔の体験で人を実験動物（モルモット）にしていた糞野郎共を潰しに行ったことを
思い出す…
それを思い出すだけでも恐ろしく思えてくる
これになる場合、全力で抵抗させてもらう

そう思いながら、時空管理局としての八神はやての返答を待つ…

「そのことなんやけど…ジオ君、管理局に入る気はあらへんか？」

「へ？」

この返答に対し、俺は思わず間抜けな声をあげた

第五話　激戦、天使と悪魔の戦い

「……ふぅあぁぁぁぁぁ、　あ～よく寝た」

今何時ぐらいだ？と思い外に目を向けると外はまだ日が昇っていない時間帯だった

「ん？起きたんだジオ、ずいぶん早いじゃない
旅が長かったせいか時間帯狂っちゃってるみたいね」

「あぁ、そうみたいだ…だがそんなもんは慣れだろ？時間が解決するさ」

そう言ってベットから起き上がり着替えていく…

「どうしたの？まだ時間には早いけど…」

「体を少し動かしてくるだけさ」

「アンタねぇ…協力体制敷いたからって勝手に動いていいの？」

俺は現在、管理局の民間協力者として登録されていた…
実際にに管理局員にならないか？
と誘われていたが俺は組織に命令されて過ごすことが嫌っているた

め断らせてもらった

〜回想〜

「そのことなんやけど…ジオ君、管理局に入る気はあらへんか？」

「へ？」

おい…ちょっと待て

「…あ〜はやて、いったい何考えてんだ？」

「何って、そのまんまの意味やで？」

「おいおいマジかよ？
はっきり言って、俺は得体も知れない奴みたいなもんだぜ？
さっき言った通り、俺の力は異常だ…
暴れだそうものならここら一体を火の海にしたり、
人の屍の山を作ることだってできちまう力を持ってんだ…
それを理解したうえで仲間に誘ってんのか？」

「そうなんかもしれんなぁ、でもジオ君…
君そんな真似なんか絶対せぇへんやろ？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながらそう宣言するはやてに若干呆れ気味に俺は

「やれやれ、俺たちはまだ会って1日も立ってねぇんだぜ？
さっきの話だってどっか嘘を交えてるかもしれないし、
そう簡単に信じるのはどうかと思うぞ？」

「そうかもしれへん、　でもそんな真似するんやったらとっくにしとるはずやし、
何より自分の立ち位置が危険になるのを承知の上で過去のことを話してくれた、
ってことはうちらと変ないざこざを起こさんようにしたかったんやろ？
それに嘘つくんやったらもっとましな嘘をつくはずや」

「…」

…こいつぁとんだ狸だ、俺が行っている意味を一発で理解しやがったよ

俺はさっき言ったことはすべて誠だ、
だが俺は冒険者だ、こいつらの仕事上保護を目的にしているが、
保護されるだけでのうのうと暮らしていくだけなんざ俺はごめんだ

ならどうすればいいか？

簡単だ、相手の組織の傘下に入ればいい…
相手に危険人物を傘下に入れるデメリットはあるが、
俺を傘下に入れることで発生するメリットは

1、強力な駒が入る

2、監視もできる上に働いてもくれる

3、もしかしたら俺の魔法技術を手にすることができる（まぁ絶対に教えないが…）

の三つだ、俺のにもメリットとして組織の後ろ盾、働き口の確保、生活の安全面などのメリットがあり、俺にも悪い話ではない

だが俺は完全に組織の傘下に入ることなんざごめんだ、だから…

「…組織の傘下に入るのはごめんだ、だが協力者ならいいぜ？」

〜回想終了〜

そう言うとはやても「それでもええで？」と承諾し、
民間協力者として登録され、管理局機動六課に協力することになった
登録が終わるとさすがに疲れがどっと出たため、その日はとりあえ

ずお開きにしてもらい、
まだ空いてる部隊部屋借りて、そこで寝むらしてもらったのだった…

「う～ん、別にいいんじゃねぇ？少し体動かしてくるだけだし？
だれか来たら訓練場みたいなところがあったからそこにいるって言ってくれ」

「はぁ～わかったよ、行ってらっしゃい、ってちょっと待って！
そんなにやけ面浮かべて一体何の訓練をするつもりなの？
そこらへん壊すようなことを考えてんならやめときなさい！」

「な～に、軽～く『１０戦』をやってくるだけだ♪」

ピシッ！っと聞いた途端レインは石のように固まるがそれを見向きもせず部屋を出る

「いつからアンタはバトルマニヤになってんのよおおぉぉぉぉぉぉっっっ！！！！」
っと、叫び声が聞こえたような気がしたけど気にしな～い♪
そう思いつつ、俺は鍛錬に向かうのであった

ｓｉｅｄ　　エリオ

「あれ？エリオじゃん、こんな朝早くからどうしたの？」

「あ、おはようございますスバルさん、
スバルさんも自主トレですか？」

「あはは、なんか珍しく目が覚めちゃって、
エリオもそうなの？」

「はい」

「そうなんだ～
ねぇ？せっかくだし、少し手合わせしない？」

「はい、お願いします！」

今日はなのはさんから明日は朝練はないと言われていたのですが、
少し早く起きてしまったため、
せっかくだから自主トレをしようと訓練場に向かっていた途中、
スバルさんも早起きしてしまったらしく手合わせをすることにしました

そして、訓練場の近くに近くまで来ると…

ギャリンッ！ギャリィィィン！！

「ん？何？何の音これ？」

「？鉄と鉄がぶつかってるような？」

何か鉄でもぶつけあうような音に疑問に思いつつ訓練場に来て見てみるとそこには…

「な、　何これ！？」

「え？どうしましましt、　って、ええぇぇぇぇぇぇっっっ！？！？」

僕とスバルさんはその光景を見てびっくりしました

槍や剣、双剣、大剣、大鎌、斧…

訓練場は数えるのがばからしくなるほどの武器で埋め尽くされていたからです…

ガキィンッ！ドカァッ！！

「ウオオォォォォォォォォッッッ！！！」

驚いているのも束の間、その奥では誰かが戦っていました…

片方は昨日保護して、民間協力者になった白い髪をした男の人でした、
もう片方は全身が真っ黒に覆われた人の影のような物体…
激しくぶつかり合い、一進一退の攻防を繰り広げていた

確かあの人は…昨日なのはさんのディバインバスターで黒焦げになっていた人だ！

「グゥッ！？」

戦いの中、白髪の人は黒い影に吹き飛ばされ、
倒れた所を黒い人影は追撃しようと持っていた剣で襲いかかるが、

「何のおおぉぉぉぉっっ！！」

白髪の人は近くにある槍を掴み、槍を斜めに沿わせて受け流し、その間に体を捻り、
黒い人影を蹴り飛ばし、そして持っていた槍と近くにあった剣を投げて攻撃を加える

だが蹴り飛ばされた黒い人影はバク転でその攻撃をなんなく避け、
また切りかかり、
白髪の人と黒い人影は打ち合いを始める…

―――その戦いはとても激しく、苛烈と言えるほどの戦いであるのだが、
反面とても美しいに思えるのは僕はおかしいのだろうか？
その光景はまるで一枚の風景画、天使と悪魔が戦っているような不思議な戦いだ…
僕はそう思えて仕方がなかった…

しかし戦いにはいずれ終わりが来る、いつまでも続くと思えてくるほどの戦いは…

ガキャァァンッッ！！

持っていた剣が耐えきれなくなり、
白髪の人が持っていた剣が折れ、そのまま黒い人影に剣で切られて戦いが終わった…

「だあぁぁぁぁ…やっぱり負けちまったか、　勝てねぇな…」

戦いが終わりやれやれと、先ほどまで苛烈な戦いを極めていた本人と思えないほど、
飄々としつつ、まったりとした口調で折れた剣を横に放り投げ、
頭をポリポリと掻く白髪の人がそこにいた…

その姿を見て、ようやく僕とスバルさんは正気に戻りました

ｓｉｅｄ　　ジオニス

だぁ～…やっぱ勝てねぇ、
相手が力、バネ、スピードが一段階上じゃ無理か…
技術や経験だけでもいい勝負になってんだから勝てるかなぁと思うんだがなぁ～
とブツブツつぶやいていると

「あ、あの！」

「おう？」

声を掛けられた方向を向いてみると、

そこには、髪の赤い１０歳くらいの礼儀正しそうな雰囲気を持つ男の子と
髪の青いその子よりちょっと年上の活発でボーリッシュ風な雰囲気を持つ女の子がいた…

二人とも何やらこちらを警戒しているような視線を向けてくるが…
はて？

「一体何をしているのですかっ！？」

「何って…訓練だが何か？　って、あぁそっか…魔法における方向性が違うのだった、
失敗失敗」

そう言って、パチンッと指を鳴らすと回りにあった武器の山と黒い影は煙のように胡散する、
刺さっていた剣の跡すらなく、
あたかもそこには初めから何もなかったように最初の訓練場の風景となる

「「…あ、あれ？」」

「驚かしちまったようだな、すまんな」

「えっと？あのっ！さっきの武器の山は何ですか！？
それにさっき黒い影に切られてませんでしたっけ！？」

「落ち着け少年よ、あれはな―――」

『幻想なる武器世界（イマジン・ウェポン・ザ・ワールド）』…俺の鍛練用の作り物の武器である
武器はすべて俺の魔力から精製されており、その武器は生き物を切ることができないが、
同じ魔力で作り上げられた武器とでは当てられるようにしてある
しかも感触や硬さなど本物と同じ強度で作り上げられているため、
実戦とほぼ同じ空気を味わえ、鍛練にはもってこいでなのだ
黒い影に関しては、俺は『己自身の弱点（ミラー・ウィークポイント）』と名づけている

自分の弱点を突かせ、克服するため、
もしくは自分の伸ばしたいと思う技術の向上させるための壁として
生み出した鍛練相手…

よく武芸者が仮想の敵をイメージして戦う想像をすることがあるが、
俺はそれを魔力で作り上げた敵を実体化させたものである…

俺の場合、あの影は自分の実力より上のありとあらゆる武器を操り、
力、スピード、バネ、身体能力が自分より優れている敵をイメージ
して戦っていた…

――――――――――

「――――と、まぁ俺はその材料となる一流と言えるほどの冒険者を
山ほど見てきたからな、
想像する分に関することは困りはしないが、その分勝つことがとて
も難しいのだがね…」

「そんな魔法だったんですかっ！？」

「すごいですね！！」

「お、おう…」

話し終えると赤髪の少年と青髪の女の子は興奮しながら詰めよって

来た…

「とりあえず近すぎだぞ？」

「「あ、すいませんっ！」」

そう言って離れる二人、
離れると落ち着きは取り戻ってきていたようだ…

「謝るほどでもなかったがまぁいいや、
俺は民間協力者になったジオニス・ウォルエール、
気軽にジオとでも呼んでくれ、
君らは？」

「スバル・ナカジマです、
スバルと呼んでください！」

「エリオ・モンディアルと言います、
僕もエリオって呼んでください、
よろしくお願いしますジオさん！」

「別に敬語じゃなくてもいいぞ、スバルにエリオだな？よろしくな、
所でお前ら今ぐらいの時間から部隊としての訓練が始まるのか？
結構早いんだな」

スバル達が持っているデバイス、だったか？

それを見た俺はここ訓練はこんなに早い時間かよ、思いつつ聞いてみる

「いえ、僕らは偶々目が覚めてしまったので、自主トレです」

「あはは～、珍しく目が覚めたみたいなんで」

「そうかい、だったら今さっきのような俺の鍛練方法だと邪魔になりかねないなぁ…」

あの方法だとあっちこっち飛びまわるわ、ぶつけ合うわで、
人は切れないって言ってもあぶねぇしな…

「あ、そうだゼオさん！」

「ん？なんだスバル？」

「よければ私達に模擬戦の練習相手になってくれませんか？
あれだけの戦いができる人はそうは知りませんし、得る物はあると思うんですが！」

「おういいぜ？俺はいろいろな戦い方ができるし、練習相手として不足はないからな」

「ルールは二対一、ゼオの攻撃方法は接近戦のみに限定、
さらにゼオの場合クリーンヒットさせられたら負け、
って言う風にしたらいいと思うわよゼオ」

そうだな、って！？

「ってレイン！？いつの間にここに居やがった！？」

「つい先よ、それより模擬戦をするんでしょ？さっき言ったルールなら対等でやれるわよ？」

「あ、あの…あなたは？」

「私はレイン、ゼオの契約精霊で相棒をやってる者よ」

「わぁ♪精霊ってホントにいたんですね！」

そう言って興奮して喜んでいるエリオ…
なるほど、精霊を見慣れていない奴ならあこがれる気持ちはわからん訳ではないが、
お前が思っているほどすごいもんでもないぞ…

「喜んでいるとこ悪いがエリオよ、あまり良いもんでもないぞ？
お菓子の摘み食いはするし、方向音痴だし、他人任せになることもあるし、
そして何よりこいつの思考回路は変態寄りｎ「唸れ私のエアースラッシュ！！」
うおおぉぉっ！？！？あぶねぇなレイン！！何しやがんだこの野郎っ！！！！」

※補足説明　エアースラッシュ☆空気を圧縮させた斬撃を飛ばす魔法☆
人がまともに食らったら一溜まりもないね♪（笑）

「私の説明するのに何いらないことといちゃってくれてんのよゼオ！誰が変態寄りよ、この鈍感女誑し！！」

「誰が女誑しだ！！誰も誑した覚えなんてないわあぁッ！！」

「だから鈍感なんでしょうがボンクラがあぁぁあぁっ！！ぜんっぜん気が付いてないから言われるんでしょうがあぁぁぁあぁぁぁっ！！！」

「なんだとごるぁああぁぁあぁぁぁあぁぁぁあっっっ！！！！」

この野郎…こいつだけはいっぺん締めなきゃなんねぇようだなっ！！

「ゼ、ゼオさん落ち着いてっ！！」

「レインさんもっ！！」

そう言って止めに入ったエリオとスバル…っち二人に免じて許してやるか…
命拾いしたなぁレインめ…

「そ、それよりさっきレインさんが行っていたルールでいいんですか？ゼオさん」

「あぁ、別にかまわん、
俺は大抵1度に複数の敵と戦ってきたからな、
それに簡単にやられるほどやわな鍛え方はしてねぇしな」

「そうですか…分かりました」

そう言って少し離れた位置に立ったエリオとスバル、そして…

「準備はいいわね、それでは！
レディ…ファイト！！」

模擬戦は開始された

第五話　激戦、天使と悪魔の戦い（後書き）

笑い猫「いかがでしたでしょうか？こんな駄文な上に投稿が遅いですが暇があったら感想ください！！」

刹那「…っと言うか感想くれんのか？これ…」

笑い猫「言ーワーナーイーデー！！」

刹那「ハァ…こんな作者で悪いが暇があったら付き合ってくれ…」

第六話　才能無き剣技、鈍感な男（前書き）

笑い猫「どうも～笑い猫っす！相も変わらず更新スピード適当なところっすができたんで投稿するっす！！」

刹那「もう少し効率良くならないのかよ…」

笑い猫「それがこの笑い猫のクオリティーなのさ（キラッ☆）」

刹那「威張るな！！それとキモイわ！！」

笑い猫「ヒデェなこいつ…それはいいとしてどうぞ！！」

第六話　才能無き剣技、鈍感な男

ｓｉｅｄ　　フェイト

朝、私となのはは部屋を出て朝食を食べに食堂に向かっていました

「なのは、朝練なかったからゆっくり眠れたんじゃない？」

「うん、絶好調だよ！」

両手を前に出して、握り拳を作ってアピールするなのは、
そんななのはに安心しつつ、私は答える

「無理しちゃだめだよ、もう、あんな心配したくないから」

「うん、大丈夫だって、心配性だな～フェイトちゃんは～」

そんな会話をしていると、キャロとティアナ達がいたので声をかけることにしました

「二人とも、おはよう！」

「え？…あ、なのはさん、フェイトさん、おはようございます！！」

「キョクー！」

「おはようございます！これから朝ご飯ですか？」

上から順にキャロ、フリード、ティアナの順に返事をする…あれ？

「ねぇキャロ、エリオは？スバルもいないようなんだけど？」

「それが、朝起きたらいなくて…」

「私もなんです、まったく、どこ行ったのかしらバカスバルは…」

あれ？エリオがいなかった…？ど、どうしよう！？

「エ、エリオ…、どこに？」

「…フェイトちゃん、ちょっと落ち着こう？」

「それで、とりあえずこれから食堂に向かおうかと」

「寮にはいないみたいなので」

「そっか・・・じゃあ、とりあえず食堂に行こうか？」

「「はい！！」」

「エリオ…一体どこに？」

「フェイトちゃん？ボーっとしてるとおいてっちゃうよ？」

「っは！なのは、待って！」

そんなこんなで食堂に行く途中、

ガキィンッ！！ドカァッ！ギィィン！

訓練場から誰かが戦っているのが見えました

「あれ？なのはさん、訓練場に誰かいますよ？」

「え？朝連ないのはエリオも知ってる…ってスバル！？エリオ！？」

「戦っているのは…ゼオさん！？」

昨日、民間協力者になってくれたゼオさんがスバルとエリオが戦っていました

「行ってみましょうよフェイトさん！」

「うん！そうだね」

みんなで、訓練場に行ってみることにしました

訓練場に行ってみると

「ん？テスタロッサ達か」

「あ？なんだお前らも見に来たのか」

「シグナム、ヴィータちゃん！」

シグナム達が、遠からず近からずの距離からゼオ君達の戦いを見ていた

「ヴィータちゃん、いつからゼオ君達は戦ってたの？」

なのはがヴィータちゃん聞くと

「いや、アタシ達はついさっきチラッと見えたから来ただけだ、しかし…はやてから聞いたが…あいつ、かなりできるな」

「あぁ、剣の才能がまったく感じられないが…あれほどの淀みのない動き、私は知らん」

その言葉を聞き、エリオ達の戦いを見てみると…

――――――――――――――――――――

「ウオオォォォォッッッ！！これでも喰らえッ！！」

スバルはローラーを転がし、右手のナックルが凄まじい回転を始め、そのまま飛び上り、拳を繰り出すが

「拳を出すタイミングが早すぎるぞ」

双剣を斜めに構え、前に出すと同時に腕に沿わせるように付け、そのまま体を軸に回転させ…

「フッ！」

「え？ぐあぁっ！？」

そのまま、スバルの横腹に肘打ちを繰り出し、スバルは吹き飛ぶ

「隙ありですっ！！」

斜め後ろからエリオが槍を構え突っ込んで来たが、

「ふむ、タイミングは良かったが…」

それを即座に片手に持った剣で上に受け止め、反対の腕は剣を放し、

「攻撃をする際に声を出してしまえば無意味だ」

「うわぁっ！？」

がら空きになった腹に掌底を繰り出し、エリオが吹き飛ばされる

そして、吹き飛ばされたスバルが戻ってきて拳を繰り出すも、
ゼオ君は流れるような動きで剣で防がれ、流され、
エリオも加わっての攻撃も同じく、攻撃を加えられていなかった…

―――――――――――――――

「すごい…」

確かに剣でのキレなどが見受けられないが、
真っ向から受け止め、流し、吹き飛ばす戦い方は私は見たことはなかった

「な？すごいだろ、あいつ…」

「剣の才はおそらく持ち合わせてはいない、
だが奴は、あの動きを経験や努力だけで身につけたのだろう…」

「正解、さすがに貴女のような一流の腕を持った人の目じゃ一発で分かっちゃうよね～」

「「「っ！？」」」

不意にかけられた言葉に驚き、私は横を見ると昨日レインと名乗ったゼオ君の契約精霊がいた

「て、　てめぇっ！一体どっから現れやがったっ！？」

「レ、レインさんっ！？」

「フフフッ、呼び捨てでいいわよ？それと最初っからいたわ、
別に警戒しなくてもいいわよ？
私はゼオの相棒のレインよ」

怪しく笑うレイン…ヴィータちゃんは突然出てきたことに警戒するが、
それを右から左え流すように全く気にしてはいない様子のレイン…
最初っからいたみたいだけど、全然気配を感じなかった…
びっくりしたぁ～…

「ちゃんとした自己紹介は後でするわよ、それよりもう終わりみたいよ」

その言葉にハッと思い、エリオ達を見てみると声を荒げてへばっている二人と、
飄々とした風に立っているゼオ君の姿がそこにあった…

突然現れたレインに気にとられていたことにより最後の瞬間は見れなかった…
残念だなぁ、まぁ仕方ない、それより暇があったら私とも戦ってもらお♪

――――――――――――――――――――

ｓｉｅｄ　　ゼオニス

ゾクリッ

「おおぅっ！？」

「ハァ…ハァ…？どうしましたか…ゼオさん…ハァ…ハァ」

「い、いや、なんでもねぇ、少し悪寒がしただけだ」

変な予感がしたが…気のせいだろうな

「それでエリオ、さっきの模擬戦だが、槍を繰り出す際に腕を伸ばしすぎだ、
もう少しコンパクトに動かした方がいいぞ、
それと動く際は迷うな、動く際は自分の考えで思いっきりやれ、
スバル、お前さんの場合、もっと相手に近づいてから拳を放つようにした方がいいぞ？
後、一撃一撃を一発だけで終わらせようとするんじゃなく、
繋げられるように技を組んだ方が相手に効果的だ」

「「ハ、ハイ…」」

模擬戦が終わり、
俺はちょっと二人にさっきの戦闘で気をつけるべき点はどこかを指摘すると、

少し落ち込んだ風になる二人…

やれやれ、

「まぁ、ゆっくり自分の欠点を直していけばいいさ、
さっきの戦いでお前らいいもんを持ってることは分かったしな、
それなりの経験と研鑽を積んでいけばいい戦士になることは確実だ」

「「（クシャリ）え？」」

そう言いながらへばっている二人の頭に手を置き、軽くなでながら
俺は告げる

「がんばれ若者（ルーキー）、まだまだスタートライン立ったばっかりだぜ？
これから直していったらいいんだ、これから…な」（ニカッ）

「「っ！ありがとうございます！！／／／」

まるで温かな春を思わせるような飄々とした笑みに、
スバルと同性であるエリオも赤くなる…

無意識のうちにナデポとニコポを発動させるが、本人はと言うと…

（うむうむ、良い返事だっ！それはいいが顔が赤いのは照れてんの

か？）

全然わかってなかった…

顔を赤らめた二人はと言うと…

（な、なんだろこれ…私、どうしたんだろ…？）

（ゼオさん、かっこいいなぁ…）

なんてことを考えていた…

そんなゼオ達を見ていたグループはと言うと…

（な、なのはなんか顔赤いよ？／／／）

（そ、それはフェイトちゃんもだよ？／／／）

（な、なんだあいつ？軽薄そうな笑みなんか浮かべやがって…
い、今のドキッは気のせいだ！／／／）

（はじめ見たときはよく分からん奴だったが…
認識を改める必要がありそうだな）

（あの人…まるで――――さんみたい、エリオ君いいなぁ／／／）

（スバル、一発で落ちたみたいね…
それよりさっきの戦い…あの人から学べる所は多そうね）

顔を赤らめる者、その光景を冷静に分析する者、頭を撫でられたことを羨む者、
ぽわーっとなるメンバーの姿が目に映り、どうしたんだ？と、
首を傾げるゼオはやっぱり鈍感だったことにレインはニンマリと笑みを浮かべる…

（グフフフッ、やっぱりゼオは鈍感だねぇ…
これだからこいつと一緒にいるのは面白くてたまらないのだよね～
血の雨が降ったら降ったで面白いのだけど…
さてはてどうなるやら♪）

と、そんなことを考えていたレインであったとさ♪

チャンチャン♪

第六話　才能無き剣技、鈍感な男（後書き）

レイン「フフフ、これでゼオは確実に修羅場コースに直行ですね」

笑い猫「今回後書きで初登場のレインさんとゼオさんです！拍手ー！！

（パチパチパチッ！！！）

ゼオニス「どうでええわっ！！それに修羅場て何だよっ！？」

レイン「ただここら一体がゼオの血で埋め尽くされるだけですよ？それがどうかしたんですかねぇ笑い猫さん？」

笑い猫「ほんとどうしたんでしょうねぇ？レインさん」

ゼオニス「こいつらの会話怖っ！！誰か止められる奴はいねぇのかよ！？」

刹那「…諦めろ、こいつらを止める術はないに等しい」

ゼオニス「ここには神も仏もいやしないのかっ！？」

つづく！！

第七話　自己紹介　嫌な予感　災厄の鼓動（前書き）

笑い猫「フフフッ、進め方決まったぞぉ…！！」

ゼオ「おい、一体何をするつもりだっ！？」

笑い猫「オリジナリティあふれる進め方だ！喜べ！かなりのヘンテコな進め方になると思うぜ！！」

ゼオ「馬鹿じゃねぇかっ！？お前の腕でそんな無茶なことしたらキャラ崩れが起きるぞ！？」

笑い猫「…それもやむなしじゃあぁぁぁぁ！！乞うご期待！！」

ゼオ「やめろおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」

第七話　自己紹介　嫌な予感　災厄の鼓動

「さ～って、腹も減ったし、飯にすっか！っと言いたいが食堂どこだ？」

「あ、それでしたら僕達も食べに行きますので案内しますよ」

「そっか、サンキュー、
こっち世界ではどんな料理があんのか楽しみだ」

「うちの所の料理はとてもおいしいですよ！」

腹もいい感じで減ったので、
食堂で朝飯を食べに行くのにその場所を知らなかったため、
エリオ達に道案内してもらうことになり、
さっそく向かおうとした時、

「ゼオニス・ヴォルエール」

「ん？」

振り返ると、そこには最初こっちの世界に来た時に、
フェイトと一緒にいたピンク色の髪をした女性と、
あかね色の髪をした小さな女の子がいた

「確か、あんた最初の時にフェイトと一緒にいた…」

「烈火の将、シグナムだ、
こっちはヴィータ、
先の戦い見事なものだったぞ」

「ま、まぁなんだ…中々やんじゃねーか…」

「そうかい、シグナムにヴィータね、ありがとよ」

「か、勘違いすんなよ！アタシからしてみたらまだまだなんだからな！」

「おおうっ！？わ、わかった（なんでこんなに動揺してんだこいつ？）」

さっきのヴィータの反応に首をかしげつつ食堂に向かうと、
俺はとんでもないものを目の当たりすることとなった

「…おい、そんなに食って腹壊さねぇのか？」

「え？全然平気ですよ？」

「むしろこのくらい食べないと訓練なんて持ちませんよ！」

どんだけ食ってんだよこいつら…

俺の向かい側のテーブルの上には、「おい、顔の部分すら見えねぇぞ？」
ぐらい盛られた料理の山があった…

「大丈夫ですよ、いつものことですから…」

「そうか…君はスバルのパートナーか何かか？」

疲れ気味にため息を吐くスバルの近くに、
オレンジ髪のツインテールをした女の子が座っていた

「ええ、名前はティアナ・ランスターよ」

「ティアナね、俺はゼオニス・ヴォルエールだ、よろしくな、
ついでに聞くが、お前さんもしかして2丁銃の使い手か？」

「っ！どうしてわかったんですか？」

「その両手のとこのタコができてるの、
それ銃とか使いまくってるとできるタコだからな、
それにほら、俺も銃の使い手だから相手が同じだと姿勢とかでも分かるんだよ」

「すごいですね、銃も使えて剣とかも使えるなんて…
さっきの戦い私も見ていましたが、私に真似なんてできそうにはありませんでした」

「まぁ世界中の国を回って、いろいろな国で得た技術や戦い方を取り入れたし、
訓練も怠るような真似はしていないからな、
そうそう簡単に真似できるようなら俺泣くよ？
俺の苦労って一体何だったんだ！ってな」

「フフッ、そうですk「ティアナさーん」あ、キャロ」

話の途中、ティアナを呼ぶ声の方向に向いてみると、
ピンク髪の肩に竜を乗せたエリオくらいの女の子が近づいてきた

「お水、取って来ました」

「ありがとキャロ」

「いえ」

「エリオの相棒か？」

「え？あ、はい、初めまして、キャロ・ル・ルシエです、
こっちはフリードって言います」

「キョクー！」

「ゼオニス・ヴォルエールだ、よろしくな」

「よろしくお願いします、所で何を話していたのですか？」

「あぁ、それはな――――」

この後、雑談しながら食事を進め、
途中はやてと一緒に来たザーフィラとシャマル、リィンフォースに
自己紹介をしたり、
なぜかわからないがレインとリィンが漫才を始めたり、
レインとはやてはいつの間にか仲良くなっていて、
怪しい会話？をしていたり（グフフとかムフフとか所々漏れていた
が一体なんだ？）、
いろいろなカオスになりかけていたがなんとかその状況を脱するこ
とに成功

それが済むと集会が開かれ、いま俺はそのエントランス部分に俺は
いる、
俺のことを紹介をするらしい…

はやてがみんなの前に立ち、集会が始まった…

「みんな、おはようございます、
今日は仕事の前に集まってもらったのは、
私たちの部隊に新しく民間協力者が来たので、その紹介です
ではゼオニス・ヴォルエールさん、レインさん、一言お願いします」

はやてがそう言うと俺に一斉に目が向く…
この状況、昔のギルドに入るころを思い出すなぁ、
と懐かしがりながら俺は口を開く

「ゼオニス・ヴォルエールだ、
ここことは違う世界の出身者で色々と迷惑をかけるかもしれないが、
よろしく頼むよ」

「私はゼオの世界で言う契約精霊『アドモス』のレイン
ゼオとは長らく相棒を務めていて色々迷惑をかけるつもりでいるから
らよろしくね♪」

うんそうだよな、迷惑をかけないように…って！

「うぉいっ！　はなっから迷惑を予定でもあるんかいっ！」

「それが私のクオリティよ！！」（ドーーーンッ！！）

「そんなクオリティいるかボケェッ！！ハァ～…とりあえずよろしく頼む」

「あ、ありがとうございました、
ゼオニスさんには今後六課の遊撃として出撃してもらうことになります
他、戦闘面のアドバイザーも込みとしても優秀なので相談役にも力を注いでもらいます
以上で解散、今日も一日よろしくお願いします！」

最後のレインのあれで変な空気になりかけていたがさすが部隊長はやて、

おかしくなりかけた空気を気にしない方向で行ってくれたおかげなんとかなったな…

まぁともあれだ、これからここで働くことになるんだし、気合い入れて頑張るとしますか！

そう思いながら、最初の仕事に取り掛かるのであった

「ハァ～…疲れた」

あの後、とてつもなく疲れたよ…ああ疲れたね！！
シグナムやなのは達を筆頭にした連続で模擬戦することになってマジで疲れたわ！！
あのバトルマニヤ共め…体中ボロボロになって尚も続けようとするなよ、まったく…

「ふわぁ～～、お疲れゼオ～」

「お前はお前でずっと寝よったんかいっ！

お前も参加しｒ「ゼオ、見つからなかった」え？」

「意思をこの星の深層まで潜らせて調べたけど、
『ヴァルサス』の欠片どこにもなかったわ」

「…ずっと探してたのか」

レインは、己を世界と浸透のを行っていた…
いわゆる自分を空気と同化させるような行為で、
世界中に意思を張り巡らせ、そこにある魔力の質を図る能力がある
これは精霊が持っている能力だが、自分が見て、
触れたものでないと感じることができないと言う制限が付いている
が、
これはかなり使える

「一応、ね…あの時、大きな爆発に巻き込まれた後、
破壊できたかどうか気になってたしね…」

あの爆発の後、ゴタゴタしていて失念していたが『ヴァルサス』ど
うなったか、
俺たちはわかっていなかった、破壊できたのか、
はたまた時空の狭間に飲み込まれたか、
想像すらできていない状況だった…

「…あれ、どうなったと思う？」

「さっぱりね、全く予想もできないわ、だけど…」

「「嫌な予感がする」」

俺とレインの声が重なる、同じ感が働いていたようだ…

「「…」」

「お前もか」

「ゼオもなのね」

「「…ハァ〜…」」

俺たちの感は大抵当たる、
はやてには一応このことを話してあるが、
俺たちも何かとしら対策は考えておかなきゃならないな…

それに俺には気になる感覚があった…

『ヴァルサス』は俺たちの世界の奴でも何だったか解明はされていない、
だが、あの時、あれに触れた時、確かに感じたモノがあった…

あれは…確かに…

「何かを脈打つ鼓動…か」

一言、静かに空を見上げて呟いても、

帰って来る言葉はなく、

ただ冷たい風が通り過ぎるだけだった…

ｓｉｅｄ　　？？？

――――――――ドックン――――――ドックン――――――ドックン――――――

どこかわからない、何もない空間の中…

…それはただ鼓動を開始していた…

災厄を誘う鼓動、それはなにを引き起こすのか、誰もにもわからない…

だがそれの名前は知っている…

それは『ヴァルサス』…

災厄の欠片…

第七話　自己紹介　嫌な予感　災厄の鼓動（後書き）

笑い猫「ヴィータの髪の色って茜色でよかったっけ？」

ゼオ「…曖昧なままで乗せやがったなこいつ」

刹那「仕方ねぇよ、所詮は作者だし」

ゼオ「だな」

笑い猫「そうか、分かったそんなに女装へんの話を作ってほしかったんだな？
作ってやるお前ら（にっこり」

二人「「なっ！？ば、馬鹿、やめｒ」」

笑い猫「こっちの分も乞うご期待♪」

二人「「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――――――…」」

第八話　連続の引き分け　忘れられぬ過去　幻想のメロディー（前書き）

笑い猫「遅くなっちまったが投稿するぜ！！」

ゼオ「…誰だお前？」

笑い猫「忘れられてるだと！？くっそ、投稿が遅れてしまったことによる弊害か・・・！！気をつけねば」

第八話　連続の引き分け　忘れられぬ過去　幻想のメロディー

ガキャンッ！ドンッ！ドドンッ！ズドオォンッ！

「こざかしいぃっ！！」

「うげぇっ！？」

そう言いながら自分の周りから迫りくる魔力弾を切り払う、って！？

「うおぃっ！
いくらなんでも３０を超える魔力弾全部切り払うなんて反則じゃねぇかっ！？」

「高町の最大弾数の『アクセルシューター』の倍は撃っているお前が言うか！」

ゼオは７７発の魔力弾を精製し、
尚且つ一発一発を個別に誘導弾として操りながら攻撃することができる
これを『ダブルセブン』と名づけている
俺はそれをシグナムに向けて放ったが…

「紫電一閃ッ！！」

大半以上はシグナムの技により消し飛ばされ、
残りは全部剣で弾き飛ばされてしまった…

「どんな腕前してんだよ畜生っ！」

「それはこちらのセリフだ！」

ガキィンッ！！

再び突撃してきたシグナムの攻撃をゼオは真正面から受け止め、流し、弾き返し、
わずかな隙がないか眼光を光らせ、反撃のチャンスをうかがっている…

シグナムは反撃させること許さないと言っていいほどの猛攻を繰り出し、
ゼオの守りを崩すべく、絶えず轟音を鳴り響かしている…

『守』のスタイルを持つゼオニス、『攻』のスタイルを持つシグナム、
二人が織りなす戦いはまさに一進一退であり、

その光景は誰もが手に汗を握るような光景であったが、

ガキャンッ！

「ぐっ！？しまっ」

「もらったぁっ！！」

ゼオニスの持っていた銃はシグナムによってはじかれ、その隙を見逃すはずもなく、
剣を放とうと突撃をかける…

「これで私の勝ちだっ！！」

「これで４６戦１勝０敗４５引き分けだな」

「～～～～～っ！」（ギロリッ！）

「あの～…そんなに睨むのやめません？」

簡潔に言うと、俺とシグナムは模擬戦をしていたのだが…結果は引き分け

シグナムは確かに俺を切り飛ばしたのだが、
俺は隠して設置しておいた魔力弾がシグナムの顎に命中、
脳震盪を起こし、そのまま気絶した

俺も切り飛ばされたことで同じく気絶したため両者ノックダウンだった

「毎度毎回このような終わり方ばかり…納得できるかっ！！」

「そう言われてもなぁ…」

そう、初めの一戦以外シグナムとの戦いはすべて引き分けに終わっていた

初めの一戦は、
ゼオニスがどんな戦い方を知らなかったために起きたまぐれでの勝利である…

俺は罠（トラップ）、奇襲、カウンターと言った戦術が得意としている

そのため、シグナムにもその戦術で挑んだわけだが…

「ある時は今回見たく相打ち、
ある時は仕込んでおいた魔法陣でうっかり己ごと巻き込んでしまい自滅、
またある時はとどめを刺そうと踏み込んで来るも足を滑らし頭をぶつけあって気絶…
さすがにここまで来れば納得いかないのも仕方ないと思うわよゼオ」

やれやれと呆れながら言うレイン…俺だって好きでなってるわけじゃないもんっ！！
ほんとだもんっ！！

「ええいっ！もう一度だっ！！もう一度相手をしろヴォルエール！！」

「げっ！？もう一度っすか！？」

実はシグナムと模擬戦する前にも何度も連続で模擬戦をしていて、
最初はスバル達と、
次はヴィータ、シグナムと繰り返しやっていて体力がやばい…
さすがに勘弁してほしい、
断って逃げてもすぐにシグナムが持っているレヴァンテインで追いかけてくるのは明白、
どうしようかと頭を抱えようとした時、

「駄目だよシグナム」

フェイトが止めに入って来た

そうだよねっ！？ここまで連続はないよねっ！？
常識人がここにいて助かったっ！と喜ぼうとした時、

「次はわたしの番だよっ♪」

天国から地獄へたたき落とされた

「何それ怖い」

「そう次は私だからね、ゼオ君♪」

「その次はあたしだからなゼオニスっ！」

「お前ら鬼かっ！？それとヴィータ、お前最初にやったろうがっ！！」

「うるせぇっ！あたしも納得いってねぇんだ、戦えゼオニス！」

「いやでござるっ！！」

「あの～ゼオさん」

「おぉティアナ！このお兄さんを助けてくれるのかな！？」

「幻術の指導、お願いします！！」

「ブルータス！貴様もなのかっ！？

不幸だあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」

某ツンツン頭の不幸な人とかぶった瞬間である…

――――――――――――――――――――

「ゼェ…ハァ…ゼェ…ハァ…」

結局、全員とまた模擬戦することになったよ…

(承諾しなかったら俺ＶＳ機動六課全員ってな感じになりかねなかったしな)

今、俺は自分の部屋でくたばってます…

あれはまさしく魔王と悪魔の巣窟だね…

この１週間、みんなと打ち解けられたが、

その間模擬戦オンリーはきつすぎると思うんだ俺…

まぁ感想として一言…

「なんでこんなことに…」

「仕方なんじゃない？結果的に言ったら全員に一回勝ってる他全部引き分けだもん、何が何でも一回は勝ちたいのでしょ」

俺は全員との模擬戦で俺は一勝、他全戦引き分けという結果に終わっている…

「それにしてもある意味神業だねぇ、疲労困憊の体で戦っておいてなおも引き分けなんて……本当に狙ってないわよね？」

「あいつらの強さでそれができる人間がいたら見てみてぇよ俺」

「う～ん…昔っから見てたけど一人の時はいっつもそれだねぇ、呪われてんのかしら？」

「怖ぇこと言うなよ、と言いたいが…あながち否定できない…」

そう、俺は昔っからこれだった…

模擬戦などで手合わせなどすれば、必ず勝ち負けより引き分けが一番多く、
決着がつかず再戦続きで引き分けばかり…

「そのせいで休む間もなく、
再戦ばかりで鬼畜と言ってもいいくらいに模擬戦の繰り返しでボロボロに…
もしかしてこれは…」

「また昔みたいに扱(しご)きの再臨だねぇ♪」

ビシッ！！っと固まるゼオニス…

『古代魔法式(ハイエンシェント)』を習得して間もない頃、早く慣れるために相当な無茶をした…
それは連続模擬戦…しかも相手はAランク級の冒険者ばかりの奴らと行った、
訓練と言う名の扱き（虐め）…

そこのほとんどが勝負に白黒つけないと気が済まない性質の奴らが多く、
模擬戦で引き分けで納得せずに繰り返し模擬戦、さらには上級魔法のオンパレード…
軽くトラウマ急になった地獄のことである…

※簡単に想像すると、
なのはのディバインバスタークラスの魔法を雨あられの状態を想像するといい…

『まともに食らったら死んじゃうね♪』　ｂｙ作者

「いやだあああああぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！
ここの人たちもみんな強すぎるよっ！？昔と同じ風にやった俺確実に死ぬよっ！？」

「だったら…

アキラメロ♪」（°∇^ｄ）　グッ！！

「誰が諦めるかっ！テメェもなんで喜んでいるようにいってんだこらぁっ！！」

「…ソンナコトハナイヨ？」

「胡散臭ぇっ！片言な所がすっげぇ胡散臭ぇっ！！
畜生…ここに俺の味方はいないのか…！！」

もはやどうにもならねェのかよ…誰か助けてください（泣）

「そして世界に叫んでも誰も助けてはくれなかった」（笑）

「もうみんな大っ嫌いだっ！！」

畜生っ、世界なんて何時かホロボシテヤルッ！！

いつも道理の観客がいないにもかかわらずコント繰り広げる俺とレインだったが、
フッ、っと急にレインの表情に影が差し始めた…

「？どうしたんだ、レイン？」

「いやぁ、楽しいなぁって思ってさぁ…」

「…レイン？」

「強くなかった時期も、強くなってからの時期も…大変だったけど、
あんたといるのはほんと退屈しないよ…その分、

傷つくことも、無くす物も多かったなぁ…」

「…」

「言わなくていいの？なのは達、結構信用してるでしょ？」

急に言い始めたと思ったら何を言い始めるのやら…

確かに俺はまだ言ってないことはまだあるが、内容が内容だけに言えんだろう…

腕のことや、『ヴァルサス』を破壊した後のこと、もう一つの二つ名…

「…どうだろな、言うべきか言わざるべきか迷っているな、俺をもう仲間だと認めてくれてんだろうが…まだ、恐れているのかもしれん…

≪何が…何が英雄だよっ！俺たちの…俺たちの家族を返せよっ！！≫

またあんなことが起きたらと思うと…な」

「ふ～ん、ま、あんなことがあったから仕方ないよと思うんだけどね…
被害を考えると雲泥の差があった、って分かってくれていると思うわよ？」

「それでも、被害が出ちまったんだ…焦らなければなかったはずの被害だしな、
それは言い訳できんよ、甘んじて受けるさ」

「あの状況じゃ仕方ないと思うけどなぁ～、
やれやれ、真面目だねぇ王子様は」

「おい、レイン！　それは」

「分かってるってゼオ、でもここじゃ関係ないでしょ？」

「それでもだ、ったく」

「フフッ、手のかかる相棒なこと」

「ハッ、お前のことだろうが…」

先ほどまでの空気は胡散し、和やかな空気になるとベットから俺は立ち上がる

「どうしたの？」

「気晴らしだ…オカリナでも吹いてくるさ」

そう言って空間魔法内に収納しておいたオカリナを取り出す…

「演出でもつけようか？」

「好きにしな」

「フフッ、りょーかい」

そう言って二人は部屋を出るのだった

ｓｉｅｄ　　なのは

「うぅ～…」

「まぁまぁなのは、いつまでも唸ってないで」

「でもフェイトちゃん、
また引き分けだよ？フェイトちゃんだって納得いってないでしょ？」

「それは…そうだけど」

私たちが話し合っているのはゼオ君との模擬戦の結果のことを話し

ていた…

勝ち負けの白黒をつけられず、
いつも引き分け続きで不完全燃焼の状態で少しムカムカしていることを話している時、
ふと気になることを思い出した…

「あ、そう言えば…」

「どうしたのなのは？」

「うん、そう言えばゼオ君ってなぜかわからないけど、
英雄って呼ばれることを嫌がってたような感じだったなーって」

「あ、そう言えば…」

思い出してみると初めに説明してくれた時の苦い表情を浮かぶ…

「レインちゃんが英雄って呼ばれるほど功績を残してみんなも認めてくれているって、
行っていたけど、その本人は自分がそう呼ばれるの認めていないって感じだったけど…」

「確かに、そうだったね…」

どうしてゼオ君は英雄って呼ばれることを嫌がっているのだろう…

そんな疑問を考えていたその時

～～～～♪～～～♪

「「え？」」

どこからか、急に音が聞こえてきた…
それはとてもきれいな音色で思わず声が出てしまった…
フェイトちゃんも驚いた表情をしている…

「すごいきれいな音色…一体どこから…」

「フェイトちゃん、あっちから聞こえてくるよ
行って見よっ！」

私とフェイトちゃんは音色が聞こえてくる所に行って見ることにしたの…

音色が聞こえてくる曲がり角を曲がると…

「あ…」

「きれい…」

目に映る光景に驚いたの…

そこにはゼオ君が座ってオカリナを吹いていて、
そのゼオ君の周りを緑色の光が雪のように舞い、
今までに見たことがないほど幻想的な光景がそこにあったの…

～～～～～♪～～～～♪

その光景とゼオ君の吹いているオカリナはあまりにも合っていて、
思わず見入ってしまっていた…

幻想的とも言える緑色の光の渦――――

優しさや尊さを感じさせる演奏――――

オカリナを奏で、
結んでいる白い髪を揺らし、艶やかな雰囲気を出しているゼオ君――

私はその光景から目を離すことができなかった…

まるで、メロディーと体が一体化するような演奏に…

「――ご静聴ありがとう、っとでも言っておこうか、
後ろのお嬢さん方？」

その光景に見入り、オカリナの演奏が終わると、
まるで夢から覚めたように二人は気がついた

『フェ、フェイトすごくきれいな演奏だったね／／／』
『そ、そうだねなのは、ってなのは顔真っ赤だよ／／／』
『フェイトちゃんこそ／／／』

不意に気がついて、
白昼夢でも見ていたような感覚になぜか気恥ずかしくなる感じがあったの／／／
フェイトちゃんも同じみたい／／／

――――彼女たちはその感覚がなんなのか、彼女たちは知らない…

ｓｉｅｄ　　ゼオニス

笛を吹き終わり、後ろから感じる気配に振り向きながら話しかける、
そこにはなのはとフェイトがいたんだが…

一体どうしたんだ？

急に向きあったり、顔を赤くしたり、あうあうあわあわし始めたり…
どうしたんだ？

「どうしたんだ？二人とも？」

「な、なんでもない、よ？／／／／」

「う、うん、そうだ、よ？／／／／」

「なんで疑問形なんだよ…」

ほんとにどうしたんだこいつら？それに顔が赤いような？

「そ、それよりこの緑色の光って何？」

「これか？これはな――――――

精霊とは、本来、目に見えない自然の産物とされているが、
人と魔力によるパスを繋げることで実体化し、見えるようになるこ

とができる

今のこの状態はレインが発現するはずの魔力を自分に流すのではなく、
周りの木や草に流している状態であり、
それに宿る生命エネルギーを目に見える状態変えているのである

そのため、今のような光景を生み出しており、
これは『聖域(サンクチュアリ)』に近い状態となっている…

「――――って訳だ、
つまりは俺らの世界で言う仮の聖域の状態になってるようなもんだな、
まぁ土台となる神殿の場所には程遠いが、
俺とレインはかなり特殊だからこそできるもんだ」

「えっと??? 」

「まぁ簡単にいえば俺もレインがこの風景を作り出す能力がある、
って考えておけばいい」

「そうなんだ、あ、さっきの吹いているオカリナ、とっても綺麗だったよ!」

「うんうん!」

「あっはっは、ありがとな…」

軽くフッと笑ってみせると顔を赤らめる二人…やっぱ風邪か？
と思ったところ、
どこからか≪鈍感めっ！！≫と、
聞こえたような気がしたのは気のせいと思っておきたい…

「ね、ねぇ、良かったらもう一曲聞きたいな／／／」

「あ、私も／／／」

「…いいぜ？」

顔の赤い二人に首を傾げつつ、笛を吹くのであった

第八話　連続の引き分け　忘れられぬ過去　幻想のメロディー（後書き）

笑い猫「できるだけ早めに投稿するようにするから見捨てないでね？」

ゼオ「気をつけるがいい」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5214v/

リリカルなのは～落ちこぼれと言われた英雄～

2011年12月29日11時47分発行